

S. Iwamoto

福音主義神学

8

1977・11

目次

論文	パウロの「主の晩餐」定型の起源に 関する一考察……………村上 久
	「ベン・シラの知恵」和訳に寄せて……………村岡 崇光
	キリスト教的政治 (christiana politica) について——序論的考察……………高力弘一郎
研究発表	カルヴァンの聖餐論……………金田 幸男
	<u>ジョン・ウェスレーの聖餐論……………岩本 助成</u>
書評	中沢啓介 山口 昇 宮村武夫 橋本龍三 丸山忠孝 金田幸男 岩本助成 高橋久之 西川重則
文献紹介	聖書翻訳に関する日本語文献……………本間 正巳
	宣教学関係——1950年以後の動向を中心に……………中島 守
活動報告	
	山中良知先生の信仰と学問……………春名 純人

日本福音主義神学会

福音主義神学

8

EVANGELICAL THEOLOGY

8

NOVEMBER 1977

Editors

T. Murase S. Haruna T. Tsumura

CONTENTS

<i>A Thought Concerning the Origin of Paul's Formula for the Lord's Supper</i> ……………Hisashi Murakami
<i>Remarks on the Japanese Translation of Wisdom of Ben Sirach</i> ……………Takamitsu Muraoka
<i>Christiana Politica — Introductory Considerations</i> ……………Kōichirō Takariki
<i>Study Notes:</i>
<i>Calvin's View of Holy Communion</i> ……………Yukio Kanata
<i>John Wesley's View of Holy Communion</i> ……………Sukenari Iwamoto
<i>Book Reviews:</i>
Keisuke Nakazawa, Noboru Yamaguchi, Takeo Miyamura, Ryūzō Hashimoto, Tadataka Maruyama, Yukio Kanata, Sukenari Iwamoto, Hisayuki Takahashi, Shigenori Nishikawa
<i>Bibliographical Researches:</i>
<i>Japanese Works on Bible Translation</i> ……………Masami Honma
<i>Missionology since 1950</i> ……………Mamoru Nakajima
<i>Reports of Activities</i>
<i>In Memoriam</i>
<i>The Faith and Scholarship of Prof. Yamanaka</i> ……………Sumito Haruna

Published by
Evangelical Theological Society

ルターはツウイングリを靈的本質の喪失した印だけ残すものと把握した。論争が始まると、反対者論破のため誇張した論法が取られたり、明瞭に語られなかったりして、論争は錯綜していった。

そこで、カルヴァンの批判と主張が明らかにされなければならぬ。カルヴァンはルターとその後継者の主張の中にある場所的現臨の立場を斥ける。カルヴァンによれば、ルター派の主張の根柢になっているのは、そのキリストの現臨在の存在方式の問題と、属性の交流という理念の問題である。前者に対して、その問題が制定辭の解釈をめぐってであることを明白にしている。パンがキリストの御体であるという文字を非常に強調して、パンはキリストの体であると信じなければならぬ、一歩退いても、「パンと共に、パンの内に、パンの下に」と表現しても、それは文字の拘泥に他ならない。むしろ、ツウイングリのように、単に象徴的に解されてもならない。そこで、カルヴァンは、制定辭が、換喩法を用いた表現であると述べる。換喩法というのは、神が「榮」においてモーセにあらわれたように、聖靈が鳩のように下ったというように、すぐれたものの名が、より劣ったものに移されたり、目にも見えるしるしが、それによって意味される「ことがらそのもの」に掃されたりする表現方法である。ニーゼルのいうように、地上的エレメントは、靈的事実を確信させるため、目にも見える形で提示するだけのものではなく、事柄そのものをも差し出すのである。(ニーゼル

『カルヴァンの神学』渡辺訳、三二二—三二三頁)

第二の問題について、カルヴァンは、慎重な言いまわしをしている。固有性の交流について、教父達も語っていることを承認する。しかし、ルター派、特にウエストファルの主張を取れば、多くの誤りを招いてしまう。固有性の交流の問題は、結局キリスト論の問題である。キリストは昇天後、その人性があらこちらに遍在することはありえない。またキリストの人性を拡大して地上にまで無限に広げることができない。フランソワ・ヴァンデルによれば、カルヴァンの聖餐論は、できるだけオリジナルなもの、つまり、できるだけ古い教理にさかのぼらうとしている。洗礼論では、アウグスチヌスをはじめ教父や、ブツァーその他の改革者から多く引用するが、聖餐論になると、そのような引用が激減する。ここに、カルヴァンの調停者としての性格を見出す。同時代の論争の一方に加担して巻き込まれることではなく、聖書の教理に、そして古代に確立された教理に遡って議論を展開していく。渡辺信夫氏は、『カルヴァンの教会論』において、これが、カルケドン信条のキリスト論をふまえた聖餐論であると把握している。

カルヴァンにとって、キリストは、聖餐において現臨される。しかし、ルター派とは区別されて、それは、いかなる意味でも、肉の場所的及び実体的現臨でありえない。靈的現臨在でなければならぬ。そして、キリストは、御霊によって、たしかに現臨されるのである。

ることを、改めて感じさせられる。

(改革派宝塚教会牧師、神戸改革派神学校講師)

ジョン・ウェスレーの聖餐論

岩本助成

一、研究の視点

1. ジョン・ウェスレー(一七〇三—一七九一)は、生涯変わることなく聖餐を重要視した。彼が執行し受領した回数に驚くばかりに多い。回数が多きで事の重要性を測るのを嫌った彼だが、習慣的で他律的な受領を拒否しつつも、何故にかくまで聖餐を尊重したのか。彼を第十八世紀の英国における福音的信仰覚醒運動(the Evangelical Revival)という視点においてのみ捉えようとする者は多い。逆に彼を、礼典(殊に聖餐)覚醒運動(the Sacramental Revival)においてのみ捉えようとする試みもある。しかし問題解決の真の鍵は、両者の相互関係にのみ存する。この視点を失うと、ウェスレーと彼の運動の總体的把握、彼の神学的特質の理解も困難とならう。

二、その歴史的・神学的背景について

【研究発表】

これは、当然、陪餐者が、如何にして、キリストの現臨在に与るのか、という問題に移行する。いかえれば、キリストとの交わりの問題である。その場合、カルヴァンは、「キリストがわれわれのものとなり、われわれがキリストのものとなる」キリストと一つになる神秘的結合こそが問題なのであるという。どのような結合かは奥義であり、自然に基づいて理解できない。しかし、L.E.Cのキリスト教綱要の訳者バトリスは、カルヴァンが、この奥義を知的不可解として扱わず、説明できないが、信者の効果的変化の上にあるものという。この結合に、聖靈が重要な役割を果されると説くことによって、聖餐論と聖靈論の有機的關係が確立される。

更に、聖餐におけるキリストとの交わりの問題をめぐって、カルヴァンは、説教との関係を重視する。聖礼典は「みえる御言葉」である。御言葉とはなれては、聖礼典は正しく執行できない。これが、カルヴァンの確信であった。そして、聖礼典は、宣教そのものにとどまらざるべきなり。(D.S. Wallace: Calvin's Doctrine of the Word and Sacrament を参照)

第二世代に属する宗教改革者としてのカルヴァンの、聖餐論における調停の試みは、妥協や政治的工作によるものではなかった。むしろ、冷静に真理を提示するより他はないとの確信の上に立ってなされている。カルヴァンが、一般的な、融通性のきかない非妥協的な神学者というイメージとは程遠いものである。

実に注目せねばならぬ。

三、聖餐論の概観

ウエスレーは単に礼典に限らず、他の一切を見るのに、四つの規準を備えていた。第一の最も根本的な規準は、「一書の人にして当然のことながら、聖書である。第二には理性、第三に経験、第四に古代教会の伝統、即ち、その教会実践の普遍的模範がある。まず聖餐は聖書に立証される神の制定である。ウエスレーはいかに聖書の多様な表現を用いつつ、この一事を力説したであろうか。それは神の与えたもう恵みの手段である。又、彼自身の生活や実際の活動の中で具体的に体験し人々を指導して見て、適切と理解でき有効と判断できた。更には国教会の伝統(祈禱書、三九箇条、典礼、説教集など)を覚醒させるものでもあった。「私がこれを使うことの中に、少しの功績もない。……しかし、神が命じられるから、私はするのである」。このような典型的なプロテスタントが、その聖餐尊重のゆえに、生涯、法王派として中傷攻撃を受けたことは皮肉ではあるが、実はこの微妙な一事こそ、問題の核心が物語られているのである。

アウグスティヌスの表現ではあるが、「しるし」が結びつける「こと」がそのもの「とは何か。ウエスレーは「罪への死と義への新生」と答えている。「しるし」は「こと」がそのもの」と同一視されないが、同時に、分離もされない。後代メソジス

第十七、及び第十八世紀の英国国教会の状況、国教会内でのソサエティ活動、非国教徒の活動などが正しく概観されねばならぬ。特に、英国宗教改革者からの歴史的系譜が綿密な研究の積み重ねによって正確に辿られねばならぬ。二人の研究者に注目したい。岸田紀教授は、少なくとも初期のウエスレーは、「完全なアルミニアニズムの世紀」に生きた、アルミニアのローエ(W. Laue)派高教会主義の系譜に立つ者として、歴史的研究を続けられる。(因に、アルミニアニズムに対する教会史的研究は未だ開拓すべき領域を多く持つ。英国におけるそれと、オランダにおけるそれとの混同などが指摘されている)。オックスフォード大学、Jesus College のウォルシュ(J.D. Walsh)も、ウエスレーをより広汎な Evangelicals の史的研究所から再検討しており、今後の研究成果が期待される。

ウエスレーの聖餐論形成には、熱烈な高教会アルミニアンであった両親、ロード派の高教会主義神学、教父学の研究、カロライン神学者の伝統が息づくオックスフォード大学、ひいてはモラヴィア派との接触、同派に流れる静寂主義による聖餐否定との対立など、重要な契機が存在する。又、アルダスゲート体験の評価も課題である。筆者はウエスレーの聖書的・体験的キリスト教の真实性を理解するが、同時に冒頭に述べた視点を忘れて徒に対立的、図式的理解を繰り返すことに賛同し難い。その福音的回心の明確さと共に、われわれは彼の聖餐経験がアルダスゲート以後も深化こそすれ、いささかも変化しなかった事

トの誤解や混乱にも拘らず、彼は「しるし」をして単なる象徴と見ることに激しく反対した。

さてウエスレーの聖餐観は以下の各項に分けて検討し得る。

(1) キリストの苦難と死の「記念」として
近年、記念(アナムネーシス)の聖書的意味が解明されつつある。彼はそれが単なる歴史的出来事の想起や受難の追憶より以上のものであることを看破していた。受領者は、「今、ここで」キリストの贖罪の恵みのすべにて参与せしめられる。聖餐において過去の出来事としてのキリストの十字架が記念されるのではなく、十字架と復活の主、現臨のキリストが、礼拝の源泉と対象として仰がれるのである。それは我らのために死んで甦り給うた主の喜びの宴として守られる。

(2) 「しるし」として
物案はキリストの体と血との「しるし」であるが、現実には真の受領者に恵みを伝達する。伝達の具体的道筋は秘義に属するが、「魂の食物」「生命のパン」の力はわれわれの中に現実に生起する。

(3) 「恵みの手段」として
聖餐受領を功績化する人々及び、恵みの手段を軽視する人々とウエスレーとは対立する。それは恵みそのものの代用として魔術化されたり、恵みと分離され対立されてはならない。物案は、「現存する実在の表示のしるし」である。彼は恵みの手段を、祈り、愛餐、断食、告白、集会励行や愛の業、御言の黙想

と聴従という多様性で理解したが、聖餐の中心的位置は動かなかった。

(4) 聖餐と終末論

聖餐は「来るべき王国の晩餐の型」である。又、召されし兄弟たちと共に食卓に連なることを自覚した。

(5) 聖徒の交わりとして

勝利の教会と戦闘の教会との交わりの食卓、ここに源泉を持たぬ愛の交わりも奉仕も深化しない。

(6) 犠牲として

永遠の大祭司であり犠牲であり給うキリストの自己奉獻以外に犠牲はない。しかもキリストは一度かぎり、然して永遠に、神の御前に自らを献げ、それを聖餐の中でくりかえして我らに示し給う。

(7) 自己奉獻として

キリストは教会を「我が体」として自己同一したもう。「キリストと共に」自らの体を奉獻せずしては、我らはその体の肢としての一切をも失う。

(8) 「キリストの現在」

この点ではウエスレーはカルヴァンの解釈に近いと思われる。母サザナとの文通に彼の理解の一端をうかがえる。彼は又、神性と人性の問題よりも、父・子・聖霊なる神の一体性により強い関心を示した。三一の神の礼典的現在を信じ、その神が受肉と十字架と復活の恵みのすべてを受領者に分ち与えられ

るとした。後代のメンジストによるウエズレーのこの観点のツウイングリーの解釈は奇妙な現象と言えらる。彼は Dynamic Presence, Living Presence を表現し得る現在観が確立してゐるからである。

この他、⑨ 聖餐受領者について、⑩ 聖餐の奉仕者について、も考察される。

四、結論

A.C. Outler は「メンジストは、教会論を持つか」と問ふ「小ぢい否」と「大きな然り」とで答へてゐる。彼らは当初、ンサエライの一回で教会形成の意図もなく、ウエズレー自身、回教会への敬愛を燃えてゐた。同時に、ウエズレーの教会論は深いものを持つ。更に、伝道活動や聖餐覚醒運動が具体的に教区に阻まれていた時期の「世界は我が教区なり」との一句は興味深い。一方において教会を教区を越えた世界教会として捉へつつ、他方、教区という具体的な教会や伝統を忘れ去らなうからである。伝道、信仰覚醒、集団的回心などという、教会論的展開や聖餐経験と無縁になり易い。ウエズレーは重厚な教会論を抱き、伝統的な聖餐観に立脚しつつ、会衆を教会訓練と聖餐経験へと導いた。彼とその運動が単なる個人的敬虔に流れ去らなかつた秘密がここにある。時あたかも三十四巻から成る「ウエズレー全集」の出版がオックスフォード大学出版部から始まつた。ウエズレーはその神学的オリジナリティを放ちつつ、彼

に半々明日の教会と神学に、主イエス・キリストの福音をより強くなり深く証しする偉大な証人であり、主のしもべの一人である。

注

- ① 岸田紀著『ジョン・ウエズレー研究』ミネルヴァ書房、一九七七年。
 - ② Geoffrey F. Nuttall, *The Puritan Spirit*, London: Epworth Press, pp. 67-80, Owen Chadwick, "Arminianism in England", *Religion in Life*, vol. 29, 1960, pp. 548-555, Carl Bangs, "Recent Studies in Arminianism", *Religion in Life*, vol. 32, 1963, pp. 421-428 など。
 - ③ 『聖教』上、野呂芳男訳、ウエズレー著作集刊行会、一九六一年、三三六頁。
 - ④ *Standard Sermons*, II, pp. 237-238, cf. *Letters*, III, p. 357.
 - ⑤ *The Works of John Wesley*, vol. II, (ed. G.R. Cragg), London: Oxford Univ. Press, 1975 が既刊である。
- (尚、この研究発表後、拙稿を大阪基督教短期大学紀要『神学と人文』第十六集に載せた。より詳細には拙論を御覧いただきたい。)

(大阪基督教短期大学助教授、図書館長)

〔書評〕

『新聖書注解』旧約第一巻「モーセ五書」

一九七六年 いのちのことは社

中 沢 啓 介

新聖書注解も今秋出版された旧約第二巻をもって、旧・新全七巻が完結した。文字通り十年がかりの大仕事であったが、聖書信仰に立つ教会は勿論、立場を異にする教会の方々からも広く歓迎されている由、まことに御同慶にたえない。

中でも、昨秋刊行された「モーセ五書」が教会に与えている益は測り知れない。これまで日本で出版されてきた五書関係の書物は、大てい近代聖書批評学を無批判に受け入れたものか、又は、批評学の投げかけている問題に無知、あるいは無視したものがほとんどで、信仰的にも学問的にも信頼しうる書は皆無に近い状況であった。しかし、新聖書注解の「モーセ五書」は違ふ。聖書信仰に明確に立ちつつ、しかも批評学的課題に学的誠実さをもって答えようとしており、現代の聖書信仰に立つ教会のニードに充分応えうるものである。執筆者は、「モーセ五書緒論」が鶴原康夫氏、「創世記」が舟喜信氏、「出エジプト記」が西満氏、「レビ記」が富井修夫氏、「民数記」が田辺滋氏、

「申命記」が後藤茂光氏で、いずれも本学会旧約部門で活躍中の学者達である。

この注解書は何といつても、聖書信仰に立っている、ということが最大の特色である。つまり、聖書が神の言葉である、との前提に立ち、聖書に「神の啓示としての特質」(舟喜氏)を認めつつ、歴史的・文獻的研究がなされている。そのテキストの扱い方においては、「聖書自身の証言と証拠は、それが偽りであると立証されるまでは真実として受けいれるという法則」(鶴原氏、三九頁)が採用される。故に、聖書信仰者と近代聖書批評学者の注解(研究)法の基本的相違は、「聖書以外の傍証のない限り、そこでは歴史的に積極的な価値を認めないか、反証がない限りそれを認めるか」(舟喜氏、六八頁)、ということにある。

われわれはこのような聖書信仰の前提と研究法こそ、近代の破壊的聖書批評学より、はるかに豊かで有効な聖書理解をもたらすもの、と確信している。事実、特に戦後の旧約学界の傾向は、これまでの聖書信仰者の主張に近づきつつある、といえよう。律法を預言者よりも前に置き、五書の歴史性をも確認しつつあるのである。

無論、右のような基本的立場は、単に伝統的見解を擁護するとか、緒論的問題や釈義において同一の結論に達する等ということを意味しない。実際、この「モーセ五書」でも執筆者の自由は最大限認められており、序言のことわり書き通り、対立